

と現実態のズレが大きい。世俗主義国家トルコも国家から分離独立した「教会制度」を創設することなく、顕著にイスラーム社会であり続けている。なお、以上の宗教の現実態はすべて多数派宗教の現実態を概観したが、少数派宗教は多数派宗教の現実態のなかで、それと妥協しつつ、独自の現実態を保持する。少数派宗教にとって現実態は彼らの帰属意識の表現として、多数派宗教の場合とは異なる重要性をもつ。

(三) 宗教の現実態の理解と宗教学 どの宗教伝統においても、宗教の現実態はその宗教共同体のあり方を基盤に存続し、現実態がその共同体を再生産する手段になっている。物心のつく子供が見慣れる風景、鐘や祈りの音、祭りの楽しさが宗教を宗教として意識することなく宗教に接する場面である。無文字社会では儀礼が重要な宗教教育を担ったが、今日でもその機能を引き継いでいる。宗教の現実態は教義から逸脱するだけではなく、理念や教義への通路となっていることを思想研究も無視すべきでない。神道と仏教という異質な宗教の共存、矛盾を感じずに双方に帰属する宗教意識を支える基盤に日本的宗教の共同体とその現実態があると解釈できる。それは仏教のみの制度化では説明できず、民族宗教としての神道の宗教共同体を積極的に評価する方法を工夫しなければならない。宗教の現実態を解明するには、古典的な宗教理論が使えないのではない。宗教の統合的理解を求める宗教学にとって、宗教の現実態の研究は試行錯誤の機会を与えられると思われる。

幸福の宗教学

関 一敏

スカブラは役立たずだが仲間を笑わせたり鼓舞したりする筑豊の坑夫の一類型である。仕事には勤勉でないのに、そこだけはえらく勤勉に坑道を上り下りして時間を見てはそれを告げに降りてくるこの人物像は、まるで自らが時を刻む振り子のようなである(上野英信『地の底の笑い話』)。こうした人物のもつ微妙な魅力と能力は、個人を切りとる生産性の指標からはとらえきれない。最小単位の individualではなく、あらかじめ社会性を含みこんだ person(人となり)として、あいだの成果をこそ測るべきである。

六年前から福岡市史民俗篇にかかわり、これまで考えてきたことを日常的なマチバのフィールドで実演すべく試みている。配布資料はそのための手控えて、①五感と日常、②マチバの幸福、③友だちと仲間、が主たる課題である(「嗚呼!閑話」『市史研究ふくおか』七号)。今回は②の話をする。

happiness の訳語を幸福にすることに西周と福沢諭吉はある種のためらいを感じていたらしい(山田洸『言葉の思想史』)。幸福を「求めて得られるべき福祉」とあえて形容句つきで定義したうえで「たまさか訪れる僥倖」と区別した。前者がハピネスの条件付き訳語とすると、後者には「しあわせ」「さち」の語感がある。すでに吾々の用法には両者を区別する意識が薄れてしまっているが、元来「仕合わせ」には「よい・悪い」が伴っていた。「仕合わせのよい人、又は家の話を承りたい」という百項目めの問いはその一例である(柳田國男「山村調査」一

九三四年)。別のところで柳田は、女兒のえくぼに愛敬よく人に認められるのを秘かに待ちうけるしあわせ観を描いていた。努力して得られるアチーブメント型の幸福(ハピネス)とめぐり合わせのよさを期待する待ちうけ型のしあわせとの対比である。後者を敷衍すれば、明言を伴わずにモノとふるまいに託して掛ける願もこれに含まれる。良縁・子宝・合格祈願から治病・厄祓い・縁切りのお百度にいたる迄。より日常的な場面では、水商売を含めて客を待ちうける商いの仕方もこの型である。

とはいえ能動・受動のいずれにおいても欠けているのは「他者」の項である。タイセン、岩田靖夫らは「人間の自律モデル」(ギリシア)に加えて「隣人の幸福モデル」(ユダヤ・キリスト教)に注目した。この場合、前者は近代アチーブメント型の源流であるから全部をあわせると三つの類型になる。「能動・受動」と「自己・他者」をかけあわせてできる四象限にこれらを配分すると、受動かつ他者の象限に空白が残るだろう。ここにスカブラを入れてみたい。自分ひとりのではなくあいだの幸福(鈴木大拙の「社会性」を求める意味では「他者」であり、自覚的でも主體的でもない点では「受動」である。なぜ自覚的ではなく、ましてや自己言及性にも欠けるかといえ、この営みが民俗Ⅱハビトウスの次元で展開することにかかわる。中世神学用語のハビトウスをアクトウスと対比させ、顕在化しない行為未満の性能にそなえの訳語を与えたのは清水哲郎だった。すなわち「そなえの民俗」はアチーブメント型の視野には回収されえない微妙な役立ち方をする。

そもそも幸福の問いは、柳田の調査項目に端を発し、利他の道をそれだけしかないかのように歩む菩薩にかかわる。ひとの又はいだの幸福に献身するこの人間像には、たんなる善意(独善と摩耗の虞)でなく、そうなることが自ずと必然であるかのように人を救うベクトル(本願の働き)がそなわっている。宮沢賢治は全体の幸福なしに個の幸福はありえないと主張した『農民芸術概論綱要』。その「雨ニモマケズ」に描かれたデクノボウの原形は法華経の常不軽菩薩に比定される。会う人ごとにあなたは仏になると云って礼拝するこの奇妙な菩薩像の、民俗版・日常版としてスカブラ型を考えることは可能か。ならば菩薩とはいったい誰であるのか?

自然概念にまつわる言説空間——現代日本の場合——

近藤 光博

本発表は、『宗教と世俗のあいだ』の説明記述を通じて、『宗教／世俗』論の精緻化をはかるべく、現代日本語の「自然」がいかなる性質と働きをもち、『宗教』や『世俗』の制度／概念／観念とどのような関係をとっているのか、明らかにしようとした。方法は、現代日本語で「自然」という語を用いた発話を大量に収集し(最終的に三五二件が集まった)、それらに言説分析をほどこすというものである。

調査研究の結果、現代日本語話者が「自然」という語を宗教概念から引き離そうとする傾向のつよさが判明した。

自然概念に宗教性を認めない立場として目立つのは、客観的で物質的な世界を「自然」とみなす立場、「宗教」を人工的／